



書道研究誌

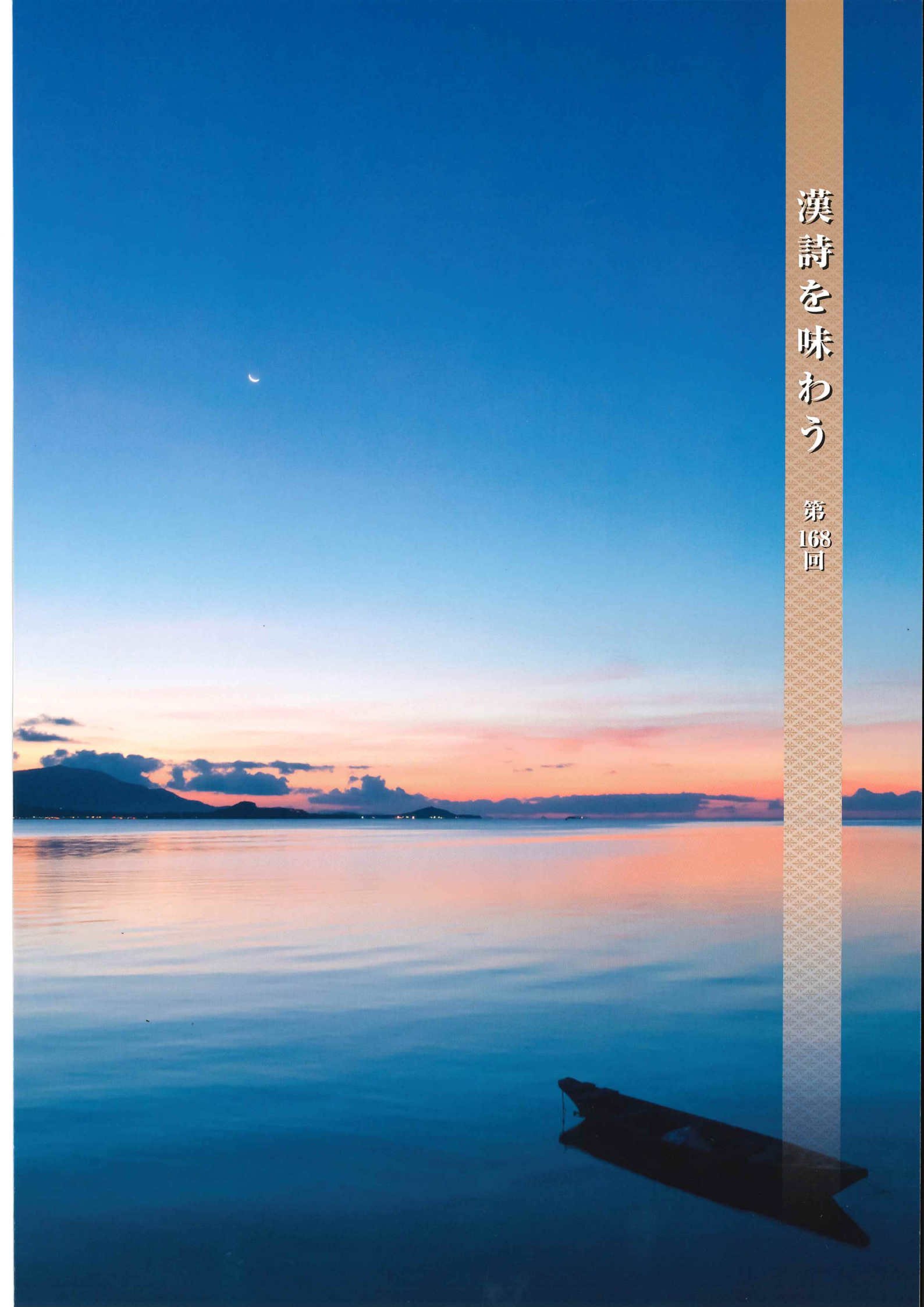
# 書の光

7  
2023

Vol.659  
宮城野書道会

漢詩を味わう

第168回



夏夜示外なつこのよがいにしめす  
席佩蘭せきはいらん

夜深衣薄露華凝  
夜深けて 衣は薄く 露華凝る

屢欲催眠恐未應  
屢しば眠りを催さんと欲して  
未だ応ぜざるを恐る

恰有天風解人意  
恰も天風の人意を解する有りて

窗前吹滅読書燈  
窓前 吹き滅す 読書の灯

夜はふけて、あなたは薄着のままなのに、露の玉が結ぼうという時刻。いくたびかお休みなさってはと勧めたく思いながら、たぶんまだ承知いただけにと思つて控えています。するとちようど天の風が、私の気持ちを察したように、窓辺にさつと吹き込み、書見の燈火を消してくれました。

《外》 夫を指す。

《露華》 光っている露。

《恰も》 ちようど。

作者の席佩蘭（生卒不詳）は清の乾隆年間の袁枚門下の女流詩人です。夫の孫原湘（一七六〇—一八二九）も結婚を契機に詩を作り始めた詩人で、当時有名な詩人夫妻でした。ふたりは一七七六年に若くして結婚しましたが、孫原湘が科挙に合格したのは、二十九年後の四十五歳でした。深夜遅くまでおそらく科挙受験のための勉強か詩作の何れか思われます。席佩蘭は夫の身を案じてお休みになったらと声をかけたいのですが、夫は承知しないだろうとためらいます。すると、まるで彼女の思いを察したように、ちようど風が吹き込んで書見用のともし火を吹き消してくれます。夫を思う優しく愛情に満ちた感情の動きを自然に表現した美しい詩です。席佩蘭はすぐれた詩人であると同時に、夫婦仲睦まじく幸多き生涯を送つたと伝えられます。それを裏付けるような逸話が伝えられています。結婚して三年後、孫原湘は父を訪ねて自分の詩を示しましたが、過去の詩人の跡を踏襲しているのみで性霊なしと言われます。性霊とは心の靈妙な働きのこと、すなわち詩に魂が籠もっていないということです。孫原湘はその後二十年にわたり作詩に潜心し、三千八百首余りを作ります。妻の席佩蘭は詩集の刊行を勧め、自分の釵を売ってお金を準備します。そして天真閣集と呼ばれる詩集を一八〇〇年に刊行しました。その五年後に孫原湘は科挙に合格しています。科挙といえは、中国では今年の六月七日から現代の科挙にも例えられる「高考（ガオカオ）」と呼ばれる全国統一大学入学試験が行われました。過去最高の一二九一万人が出願したと言われ、各地の試験会場では受験生のために交通規制が敷かれるなど、国を挙げての大イベントの様相でした。中には五十六歳で二十七回目の受験に臨んだ人がいてニュースになりました。

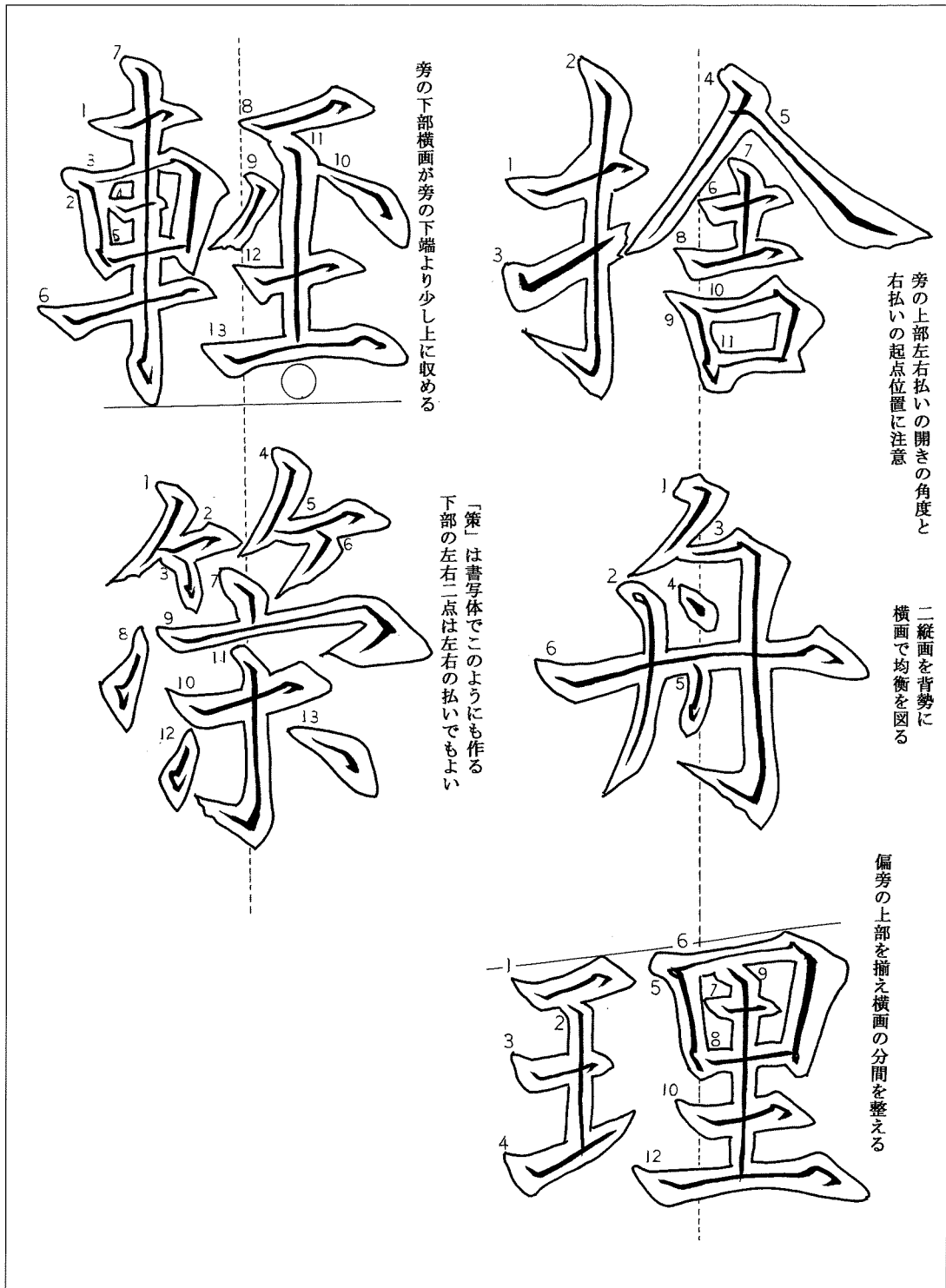
参考文献・漢詩大系「清詩選」（集英社）



捨舟 輕策  
理

読み  
舟を捨てて輕策<sup>けいさく</sup>を理<sup>わき</sup>む  
(舟を乗り捨て輕杖のたすけを借りる)

佐藤象雲書



旁の上部左右払いの開きの角度と  
右払いの起点位置に注意

二縦面を背勢に  
横面で均衡を図る

偏旁の上部を揃え横面の分間を整える

旁の下部横画が旁の下端より少し上に収める

「策」は書写体でこのようにも作る  
下部の左右二点は左右の払いでもよい

- 一般部規定課題出品について
- 規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
- 初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
- 規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

王維詩

「藍田山の石門精舎」

(前半)

落日山水好

落日 山水好し

漾舟信歸風

舟を漾わせて 歸風に信す

玩奇不覺遠

奇を玩んで遠きを覺えず

因以縁源窮

因りて以て源を縁ねて窮む

遙愛雲木秀

遙かに雲木の秀でたるを愛し

初疑路不同

初めは路の同じからざるかと疑う

安知清流轉

安んぞ知らん 清流轉じて

偶與前山通

偶々前山と通するを

捨舟理輕策

舟を捨てて輕策を理む

果然愜所適

果然として適する所に愜う

老僧四五人

老僧 四五人

逍遙蔭松柏

逍遙して松柏に蔭う

(後半に続く)

草書

行書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

輕榮 捨身理

輕榮 捨身理

次号課題

隸書

所適 果然愜

輕榮 捨身理

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支部	順位	氏名
夕立の雲もとまらぬ夏の日の	かたぶく山にひぐらの声	

新古今和歌集「式子内親王」

和泉溪石先生書



佐藤象雲書

音

チヤクコウシゾク  
サイシジヨウシヨウ

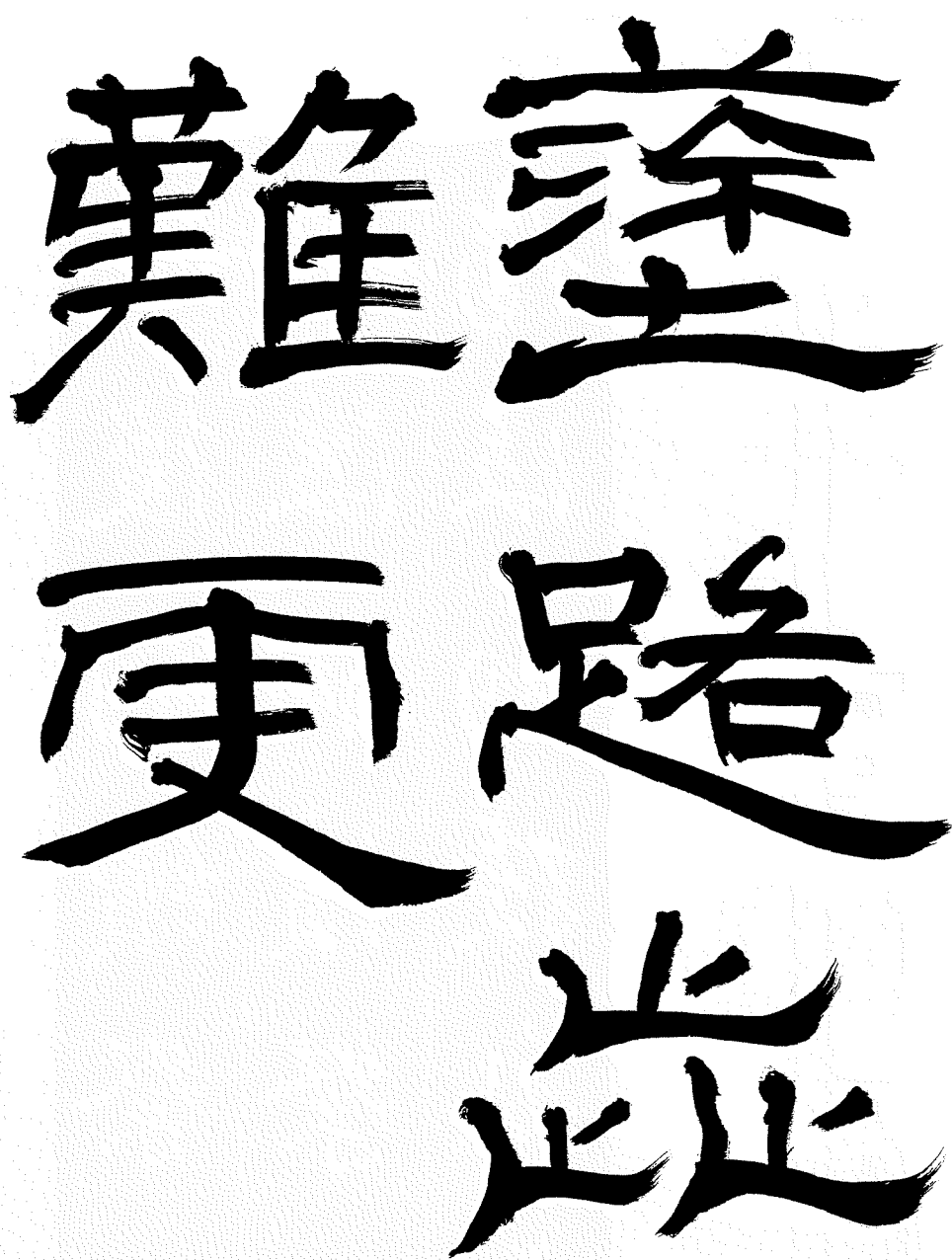
略解

祖先を大切にして血統を継ぎ  
祭祀を夏冬怠ることなし





塗路澁難更……



■ せきもんじょう 石門頌 (後漢・西暦一四八年) の臨書 (8)

象雲臨

『塗路澁難更』

石門頌は後漢時代の隸書全盛期の作品です。この碑が磨崖に刻されたあと二十一年間に乙瑛碑(一五三)・禮器碑(一五六)・孔宙碑(一六四)・史晨碑(一六九)など八分隸の代表的な作品が登場しています。これらの代表的な漢隸と異質な感がありますが、磨崖碑で褒谷溪谷の石質が固く足場の悪い斜面に刻されたことを念頭に置く必要があります。線が細いために重厚感はありませんが、その分飄逸で明るく古趣を感じます。波磔は押し並べて暢びやかで、全体の構成は均整です。

〔塗〕 方形の空間に偏りなく線が配在されている。

〔路〕 敦煌漢簡にもあるが、偏の終画を波磔としてその上に「各」を載せている。

〔澁〕 サンズイはなく、「止」を上下に配置している。それぞれの波磔に変化をつける。

〔難〕 横画を均整にして偏旁互角に。

〔更〕 線がしなやかで、左払いと右波磔のバランスが絶妙。

幼  
懷  
貞  
敏

幼くして貞敏を懐き……

幼  
懷  
貞  
敏

象  
雲  
臨

■王羲之・集字聖教序(唐・西暦六七二年)の臨書 (22)

『幼懷貞敏』

書聖と冠されて語られる王羲之の書は、その書の全貌は明らかにされていませんが、その芸術的精神は多くの書家によって受け継がれています。伝統書を学ぶ私たちがだけではなく、前衛書を標榜する書人にも大きな影響を与えています。事実として、唐時代に太宗によって高揚され頂点を迎えた王羲之の書は、それ以降王羲之の規範性を尊重する書人と、その殻を破り新たな書の美を創出しようとする書人とのせめぎ合いによって、その時々時代の性というものを反映して変遷してきたことができます。

今月の四文字のなかの「懷」はこの王羲之の字の集字をした僧懷仁の一字ですが、王羲之蘭亭序で五回登場するなかからの集字と思われまます。蘭亭序は真蹟が失われ、様々な臨本が伝来されていますが、参考まで「馮承素本」の「懷」のすべてを掲げます。

懷  
懷  
懷  
懷  
懷